

日本地震工学会年次大会 2011 開催報告

年次大会 2011 大会実行委員会

1. はじめに

2011 年度年次大会は、2011 年 11 月 10 日（木）～12 日（土）に東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催された。昨年度は、4 年毎に開催されている日本地震工学シンポジウム（第 13 回）が開催されており、2 年ぶり 8 回目の年次大会となった。なお、同会場では、大会初日の午前中に本学会創立 10 周年記念式典も実施され、現会長および歴代会長からの挨拶、功労賞表彰などが行われた。

年次大会の準備は、2011 年 3 月から開始されたが、東日本大震災の発生で開催準備はほとんど進まず、実質的には 5 月になってから始まった。大会実行委員会には、研究や実務で多忙な中堅の方々も多いので、メールでの審議を中心に準備を進め、派手な大会ではなく、学術講演と議論が充実するような大会の運営を目指すことにした。

2. 学術講演

今回は、東日本大震災後の初めての年次大会であったこともあり、表 1 のように、前回に比べて 4 割増の 248 編の講演申し込みがあった。このうち、62 編は東日本大震災関連の発表であり、地震工学関連分野での横断的議論を行うことができる場としての本学会の存在があらためて認識されていることがわかる。発表セッションは、前回と同様のセッションに加えて、東日本大震災関連の 3 つのオーガナイズドセッションが追加された。また、35 歳以下の若手発表者数も全体の半数以上となった。会員数の減少対策が多く学会で将来の課題となっているなか、若手講演者数が多いということは頼もしいものである。

3 日間での参加者は、393 名であり、内 100 名は非会員であった。会員以外の方々にも興味深い講演が多かったことが伺える。なお、当日の受付で用意した約 400 部の梗概集が売り切れてしまい、参加費を受け取らなかった参加者にはご迷惑をおかけした。こうした参加者の皆さんは上記の数にカウントしていない。

学術講演は、6 会場に分けて行われ（写真 1）、各発表は質問を含めて 15 分間とし、十分な議論の時間を確保することができた。ただ、会場の関係で講演場所が離れてしまい、参加者の皆様にはご不便をおかけした。

表 1：2011 年度大会発表応募者数

分野	発表数	
震源特性	10	44 (16)
地下構造	6	
地盤震動	23	
地盤の液状化・斜面崩壊	1	
津波・歴史地震その他	4	
地中構造物およびダム	2	120 (89)
杭および基礎構造	3	
地盤と構造物の相互作用	7	
土木構造物	5	
建築構造物	61	
免震・制振・ヘルスマニタリング	32	
耐震補強	7	
新しい構造・材料その他	3	16 (7)
ライフライン	3	
緊急速報・災害情報	9	
防災計画・リスクマネジメントおよび社会・経済問題	4	36 (16)
東日本大震災調査	30	
最近の地震被害調査	1	
その他	5	32 (4)
2011 年東日本震災における液状化被害の実態とその後の諸対応	14	
東北地方太平洋沖地震による強震動 - 地盤構造が地震動に及ぼす影響 -	12	
東北地方太平洋沖地震による橋梁被害	6	
合計	248	(132)

*発表数の括弧内の数字は若手発表者数を示す

各セッションでの学術講演の報告は、座長の皆様にお願ひした。司会をご担当くださった皆様には感謝申し上げます。ここでは、紙面の都合で掲載することができないので、学会の WEB サイトで公開する予定である。

本大会では、前回に引き続いて、若手地震工学者を対象にして大会論文優秀発表賞の審査が行われた。35歳以下の講演者によるすべての講演について審査員による慎重な審査が行われた。その結果、13名の皆さんが受賞者に選ばれた。詳細は、学会ホームページに掲載されている。



写真1：講演会場の様子

3. 技術フェア

技術フェアは、写真2のように受付と休憩室を兼ねた第7会場（310室）において、出展企業9社（ミットヨ、アーク情報システム、勝島製作所、白山工業、システムアンドデータリサーチ、aLab（エーラボ）、ソフトテックス、サンシステムサプライ、東京測振）により開催された。振動測定機器、ネットワークデータ収集システム、解析ソフトといった多岐にわたる内容で、参加者から多くの関心が寄せられていた。東日本大震災の影響もあり、効果的な減災には地震・振動計測や解析機器がより一層重要になってきている。出展された企業には感謝申し上げます。



写真2：技術フェア会場の様子

4. 交流会

大会初日の10日夕方には、施設内のレストラン「さくら」において交流会が開催され、約60名の参加者を得て大変盛況であった。川島和彦会長の挨拶と乾杯の

音頭から開始され、例年よりも参加者が多かった若い学生会員も交えて、会員同士の交流は大いに深まった。懇談が進むなか、当日午前中の創立10周年記念式典に引き続いて、鈴木浩平元会長による挨拶、また功労賞を受賞された勝俣英雄氏から挨拶があり、大いに盛り上がった。最後に、山中浩明大会実行委員長から大会の成功を祈念した挨拶が行われ、学生有志による一本締めによりお開きとなった。



写真3：交流会の様子

5. おわりに

多くの講演者、参加者を得て、第8回年次大会も盛会のうちに終わることができた。多くの皆様には、大会の準備、運営にご協力を頂いた。とくに、川島会長、久保前会長、理事の皆様には、ご理解とご助言を頂いた。皆様には、あらためて感謝をする次第である。

今回も含めて過去の大会では、その準備・運営は、アドホックな実行委員会が担当していた。その結果、大会開催に関するノウハウや改善点が必ずしも十分に次の実行委員会に引き継がれていない場合もあった。また、一部の委員に仕事が集中してしまうことも多かった。本大会の実行委員会では、こうした運営形態は必ずしもベストではないと考え、大会運営に関する委員会の常置化を担当の若松副会長にお願いをした。ぜひ、次回の大会運営が円滑で持続可能なものになることを願っている。

なお、本大会の梗概集の印刷版（写真4）の残部はほとんどないが、PDFをまとめたCDは事務局で入手することができる。



写真4：本大会の梗概集